

中村恵子 監修／山本康稔、佐々木良 著

もっと！らくらく動作介助マニュアル 寝返りからトランスファーまで[DVD 付]

杉本 篤夫（東海大医学部専門診療学系リハビリテーション科学）

近年、いわゆる高齢化に伴い介護を受ける人口は増える一方です。しかしそれらの人々を日常的に介護するのが、理学・作業療法士など運動生理学を学んできた専門家である場合は多くありません。病院等では看護師や介護士、あるいは無資格の助手と呼ばれる人たちも必要に応じて介護をすることもあるでしょう。また、在宅においては、担い手は家族が中心となります。

そんな中、多くの理学・作業療法士が、看護師や介護士、家族の人たちから「どのように動作介助をすれば楽にできるのでしょうか」という質問を受けます。そのうえ、時間をかけてわかりやすく説明したつもりなのに同じようなことを何回も聞かれたり、教えたことと異なる方法で介助しているのを目にする経験もよくあるでしょう。もちろん介護する者、また介護される者の体格、体力、病態、そして介護する場所とその環境等で、介護の仕方は変えなくてはなりません。そこで、それらの方法をわかりやすくまとめている本がないかと探すのです。ところが、今回紹介する「もっと！らくらく動作介助マニュアル」を一読してもらえれば、今後はあまりいろいろと探す必要がなくなるかも知れません。

この本は写真が多く、見て理解しやすい内容です。多くの身体状況を網羅していて、多種多様なケースに対しての介助法がわかりやすく描かれています。また、付録の DVD では実際に近い介助の仕方

が具体的に映像と解説で示され、何度も確認することができます。ですので、動作介助が初めてというような経験の浅い人にも、安心して紹介できます。

この本を読んでいくと、以下の 2 点が基本的な考えとして理解されます。1 つは持ち上げない介助、もう 1 つは患者の残存能力を利用するということです。残存能力を利用するということは、できるだけ、できる動作を行ってもらおうという元来のリハビリテーション的な考え方でもあります。過剰な介助をすることは、患者の残存能力の維持・向上を妨げる結果につながると思います。適切な方法だけでなく、適切な量の介助という考え方です。

最後の 8 章では、この本で紹介された介助方法と従来施行されていた方法の動作の違いを、三次元動作解析を用いてわかりやすく説明しています。もし今まで行ってきた介助方法に疑問を持っておられる方や、他の方法を試してみようと思っておられる方はぜひとも一読していただき、楽だと思われたらそれを実践し広めていただければ幸いです。介護される人は介護する人が倒れると共倒れになる危険があります。そうならないためにも専門家が一読して、今後の臨床に用いるかどうか判断していただきたいと思います。

〔B5 頁 204 3,780 円（本体 3,600 円＋税 5%） 2005 医学書院 刊〕